

「性的差異」のケア倫理学

——フェミニズム倫理学と和辻倫理学における「肉体」の問題——

森村 修

一 はじめに

本稿の目的は、フェミニスト哲学者E・マッカーシーの『肉体化された倫理』(二〇一〇)の「肉体的性」概念に着目することと、L・イリガライの「性的差異の倫理」と和辻倫理学との比較を通じて〈肉体化されたケア倫理〉を考察することである。その際に筆者は、〈ケアの形而上学〉(「メタ肉体学」)の視座のもとで、〈肉体化されたケア倫理〉を〈ケアの地球倫理〉への一階梯と捉えて考察する。

筆者のいう〈ケアの地球倫理〉とは、人間や〈地球〉の生きとし生けるものすべてをケアの対象にする倫理である。〈ケアの地球倫理〉における〈地球〉とは、「あくまでも統一されよのない不可視の全体」であり、「統一されようもない多種多様性」無限を包んでいる」が、「同時に無際限ではなく閉ざさ

れて」いながら、「生命を含む生産の総体であり、社会形成を含む出来事の総体」を意味する。しかも〈ケアの地球倫理〉は、過去の存在者や来るべき未来の存在者をも含むがゆえに、〈形而上学的〉(「メタ肉体学的」な思考)が要請され、〈ケアの形而上学〉による基礎づけが必要となる。

そもそも「ケアの倫理」とは、C・ギリガンの「異なる声」(一九八二)に始まる。彼女は、L・コールバークの男子をモデル化した「道徳性の発達」理論を批判し、女子の道徳性を「ケアの倫理」として特徴づけ、男子の「正義の倫理」に対置した。それ以後、ケア倫理には性的差異の問題が纏わり付いている。しかもケアの倫理は、他者への気遣い、配慮、他者の肉体的世話という〈ケアの実践〉と不可分である。また、他者が性的肉体を保持する以上、〈性的肉体に関わるケアとは何か〉という基礎づけ的な問いを避けることができない。

以上から本稿では、イリガライと和辻の〈あいだ〉を架橋するマッカーシーの挑戦を引き受け、〈肉体性を介したケア倫理〉を下記の三点を中心に検討する。第一に、マッカーシーに即して、和辻倫理学の「ニンゲン ningen」概念を検討する。第二に、マッカーシーの〈ケアのフェミニニスト倫理学〉から〈間柄の倫理〉と性的差異の倫理を考察し、「性的差異を含んだ間柄の倫理」の問題点を指摘する。第三に、ケアにとっての〈ケアの形而上学〉の必要性に言及する。

二 「肉体性」と「間柄」の問題

—フェミニニスト哲学から見た「身心」

マッカーシーは、比較フェミニニスト哲学の立場から、近代日本哲学と現代西洋フェミニニスト哲学という「それ以上、かけ離れたものはありえない二つの哲学」⁽³⁾を比較し、「肉体化されたケア倫理学」を構想する。彼女によれば、和辻の唱える「人間の学としての倫理学」は、「人間」を「人と人との間柄」として考察することで、西洋個人主義的な伝統を批判し、乗り越えようとした。「和辻の倫理学理論の核は、〈ニンゲン〉⁽⁴⁾として理解された人間存在についての彼の概念である。倫理的諸問題の場所は、彼がいうように『孤立化された個人の意識のなかにあるのではなく、まさに人と人との間にある』。いいかえれば、倫理学とは人間存在の研究、あるいは〈ニンゲンガク〉である。つまり人間存在とは、単に個人的としてだけでなく、世界に

おける様々な自己のあいだの間性(アイダガラ)における社会的なものとしての人間存在である」⁽⁵⁾。

彼女にとって、〈ニンゲン〉が個人性も社会性も同時に含んでいる概念であることが重要だった。和辻によれば、「人間存在」の「二重構造」⁽⁶⁾は、個人性と社会性を含む否定の運動として位置づけられる。行為する個人は人間の全体性を否定することで成立し、人間の全体性はまた個人の個別性を否定することによって成り立つ。つまり「二つの否定が人間の二重性を構成する」⁽⁷⁾。それゆえ、「人間存在が根源的に否定の運動である」ということは、人間存在の根源が否定そのもの、すなわち絶対的否定性⁽⁸⁾であり、「個人も全体もその真相においては『空』であり、そうしてその空が絶対的全体性」⁽⁹⁾に他ならない。

和辻に言及するマッカーシーは、自己を「空 empty」として解釈することを通じて、自己を実体的存在として捉えることから逃れられると考えた。彼女によれば、自他が互いに「空」であることで相関的になり、互いに結びつけられていたり、ささえ合ったりすることができる。それゆえ、マッカーシーによれば、〈ニンゲン〉が絶対的否定性としての「空」である限り、自他の「アイダガラ」も常に相対化されうる。というのも、自己も他者も〈アイダガラ〉においては相対的であり、両者の関係性も流体的／可変的であるからだ。しかも両者は〈アイダガラ〉として互いをささえ、結びつき合う。こうしてマッカーシーは、〈ニンゲン〉のなかに、ケアの倫理に「互いにささえ合

うこと」という概念の萌芽を見いだす。

しかもマッカーシーは、和辻の「肉体」概念も見逃さない。彼女は『風土―人間学的考察』（一九三五）のなかに和辻の肉体観を見だし、和辻にとって肉体が単なる「物体」ではなく、「肉体の主体性」があることに注意する。「主体的な肉体なるものは孤立せる肉体ではない。孤立しつつ合一し、合一において孤立するというとき動的な構造を持つのが主体的肉体である」という和辻の指摘から、彼女は、和辻の肉体を「自己活動的身体 (self-active body)」と考える⁽¹¹⁾。

〈ニンゲン〉は「肉体化されたもの」としての自他の〈アイダガラ〉を含んでいる⁽¹²⁾。そして彼女によれば、和辻の自己は肉体を介した間柄の関係を孕んでおり、それが自己を形成している⁽¹³⁾。彼女は、和辻の「肉体的連関」の例として、母子関係と友人関係をとり上げ、母子・友人同士の関係性のなかに〈アイダガラ〉を介した倫理的空間を見いだす。また彼女は、湯浅泰雄の肉体的「間柄」解釈を援用して、「和辻においては、生活Ⅱ空間における主体的意味連関としての『間柄』は「肉体的連関」として」捉え、その連関は「心理的關係でもなければ物理的關係でもなく、またその両者の結合と考えてもいけない⁽¹⁴⁾」という。

彼女は〈アイダガラ〉を肉体的連関として捉えることで、肉体的連関が物理的肉体の関係ではなく、〈アイダガラ〉として互いを結びつけるという。しかも彼女は、それを「親密性と身心の合一 intimacy and oneness of body-mind」と考える⁽¹⁵⁾。こう

してマッカーシーは、〈ニンゲン〉や〈アイダガラ〉の「肉体的性」から「肉体化された倫理」を構想するのである。

三 性別分業から「性的差異」の問題圏へ

―「ケア」のフェミニスト倫理学

マッカーシーによれば、ケアのフェミニスト倫理学は、〈互いに結びつけられていること〉と〈互いにささえ合うこと〉に着目するという点で、和辻倫理学と関わる。というのも、両者は〈肉体化された関係性〉を共通点にもつからだ。しかし、もちろん、両者がすべてを共有するわけではない。フェミニスト倫理学は、女性の主体性 (female subjectivity) を放棄せず、自他の関係性に基づく倫理学をめざす。それは、自他間にある親密性を基礎にする倫理であり、自己のうちに他者との関係性を包摂し、両者の相関関係と相互依存性を重視する。しかし、女の自律性 (women's autonomy) は手放さない。

それに対して和辻倫理学は、肉体的連関に基づく「個的な」肉体を消去する方向に向かう。和辻が、間柄の倫理を「人倫的組織」へと発展させ、「二人共同体」の「性愛と夫婦」を語る⁽¹⁶⁾とき、フェミニスト倫理学との差異が強烈に際立つ。和辻にとって性的差異の問題は、「性愛」によって「夫婦〔男女〕が「肉体的合一」となることと切り離せないからだ。

しかも〈肉体化されたケア倫理〉にとって重要な問題こそ、ケア倫理のなかに性的差異と相互の肉体的性を組み込むことであ

る。ちなみに昨今のケア倫理研究では、性的差異の問題は性別分業の問題として議論されている。F・ブルジェールは『ケアの倫理』(二〇一一)のなかで、「キャロル・ギリガンは、自身の著書『異なる声』で、私たちは男たちと違う形で道徳について考えるのだと述べた。そのとき、彼女は、男女の性別分業を道徳にまで適用しようとしたのではない。そうではなくて、彼女は、ほとんど隠され、議論されないままにされてきた概念、『ケア』を明るみにしようとしたのである。すなわち、『配慮すること』が女たちに任されていること、それは、隠され、議論されず、さらに、無視されてきたのである」と述べている。

ケアの倫理が議論されるまで、ケア労働者の多くが女性であったし、そのことを公に議論する場もなかった。それゆえブルジェールがいうように、「ケアの倫理」は、家長長制の、男性中心の権力が課した多数派の道徳を理想とするのを止めようと提案する。(中略)重要なことは、このような「これまで封じられていた」女たちの「道徳」の声を舞台上で登場させ、道徳の境界を変えることだ⁽¹⁸⁾。

おそらくマッカーシーもまた、フェミニスト倫理学に根ざす限り、ブルジェールに同意するだろう。ただ私たちには、性別分業を語る「前」にまだ問題が残されている。「女たちの声」を「道徳」という「舞台」に登場させる「前」に、性的差異そのものを問題化する必要がある。

四 イリガライの「性的差異の倫理」

—「他者の超越」という問題

イリガライは、『性的差異の倫理』(一九八四)で、「性的差異はおそらく現代のただ一つの考えるべき事柄でしょう⁽¹⁹⁾」と語っている。和辻から〈アイダガラ〉を学んだマッカーシーは、イリガライから「性あるいは肉の倫理⁽²⁰⁾」を学ぶ。それでは、「性的差異の倫理」とは何なのか。

まずイリガライにとって、性的差異以外に他者性はありえない⁽²¹⁾。他者とは「永久に知ることのできない」、「性的に異なる」他者である。女と男の差異は消去できず、両者を一方に還元できない。それゆえ、イリガライにとって、性的差異とは存在論的差異でもある⁽²²⁾。

しかも彼女は、性的差異の倫理が成立するためには、「賛嘆に立ち帰らなければならない」という。彼女によれば、「この『デカルトの』情念は反対物も相容れないものも持つことはなく、しかも常に最初の一回かぎり」であり、女と男は互いに入れかわることができないゆえに、常に最初の一回だけ出会う⁽²³⁾。性的差異があるから、女と男が出会うことができる。性的差異が男女を結びつける。そして両者の出会いが「賛嘆」を生じさせる。「賛嘆は男女両性をその差異という資格において代替不可能なままに保っている」。「両性の間に自由で魅惑的な一つの空間」と「分離と結合の可能性がある」⁽²⁴⁾。つまり、両性のへあ

いだ」という「自由で魅惑的な一つの空間」が〈アイダガラ〉なのだ。〈アイダガラ〉は、両者の性的差異を孕みながら、倫理的空間として両者を結びつける。マッカーシーは、そのことを和辻とイリガライの〈あいだ〉から学んだのだ。

さらに、マッカーシーは、女の主体性を「身体化された主体性」として位置づけ、イリガライのいう皮膚や粘膜による身体接触に着目する。イリガライによれば、女も男も「愛」のなかで差異を介して共存する。「愛する二人が、皮膚の境界を越えて身体の粘膜に達し」、「共有の空間で同じ息を吸い」、皮膚という「二人の身体と外部を区切る比較的ドライでくつきりした輪郭を捨てて、流動する宇宙に突入し、二人であるという感覚が不明確になる」⁽²⁶⁾。愛の行為のなかで、特異的な個の差異が曖昧になる。ここでは、「流体的／可変性」や「粘性」という概念が重視される⁽²⁷⁾。イリガライが「愛撫」や「性的関係〔性交〕」を強調するのは、愛による肉体的な関わりでは性的差異を保持したまま、他者との交流が行われることを強調したいからだ。和辻もまた、「二人共同体」の「愛の体験」では性を異にする他の人格の引力を感じ、「肉体的交渉」ではなく、「愛や人格の契機を含む」男女間の関係が強調されていた⁽²⁸⁾。マッカーシーは、イリガライの「愛の、肉体的分かち合い」に注目し、「愛とは、他者の超越を歓迎する場所である自己」を開くことで生ずるとい⁽²⁹⁾。彼女は、イリガライの「性的関係〔性交〕」を隠喩として理解することで、それを〈ニンゲン〉と

いう世界内存在へと拡張できると考えた。「〈アイダガラ〉は、特定のあなたと特定の私との超越 (transcendence of the you and me)」のためのモデルを提供する⁽³⁰⁾。そのモデルは、性の〈あいだ〉だけでなく、様々な文化や哲学的伝統の〈あいだ〉へ拡張できる。それは、筆者から見たとき、生者と死者、生者とこれから生まれ出るものとの〈あいだ〉へも拡張できるはずだ。

しかしマッカーシーとイリガライとの〈あいだ〉には決定的な差異がある。マッカーシーは、イリガライの「粘液状のもの」や「流動性」概念と〈ニンゲン〉概念を重ね合わせる際に、詩人哲学者E・グリッサンに触れている。ちなみに高祖は、グリッサンの「関係性の詩学」に触れて、「それ〔関係性の詩学〕は、それぞれの特異性が、己を解体することもなく、消滅させることもなく開くことができるような関係性の場であり、かつそのような状況への讃歌である。『関係性の詩学』が一方で重視するのは、非中心的な翻訳の連鎖である」⁽³¹⁾。アナキストである高祖は、多言語が行き交う「群島の世界」(グリッサン)の様子を、誤解をも含み込む差異の関係として捉える。そこに彼は「新しいアナキズム」の可能性を見るが、まさしくケア関係とは、差異に基づく誤解と不理解、差別と排除という動的関係が成立するある種のアナーキーな、そして統制不可能な場なのだ。

さらに筆者は、イリガライのように、愛による「心身の合一」や自他の「肉体的分かち合い」をケア倫理の基礎と考えることはできない。愛のもとに個々人が共同態のなかで一つになると

いう見解には同意できない。性的差異を愛の行為によって消去することは、「全体化する枠組み」に加担することにつながる可能性がある。和辻は、自他は絶対に他者でありながら、人間存在の二重性のゆえに個人が社会のなかに「消える」と語った。⁽³³⁾「人間」とは「人と人との共同態」であり、社会であることによつて、個人の〈特異性 singularité〉と両性の差異を「消す」。そして、「異なるもの」への暴力や排除を伴う可能性を呼び寄せる。ケア倫理は、あらゆる暴力に抵抗する倫理でなければならぬ。それゆえ、地球に対するケアを含む〈ケアの地球倫理〉は、全体化の暴力を限りなく回避し続け、性的差異・文化的差異・種の差異等の差異を尊重し、互いが「他者の超越」において出会うことを必須としなければならない。しかも、アナキーなケア関係とは単なる〈無秩序〉ではないことも付言しておこう。

五 おわりに――〈ケアの形而上学〉に向けて

和辻もイリガライも、愛のなかで性的差異を乗り越えてしまう。もちろんイリガライは、性的差異が還元不可能であるという。しかし、女と男の〈あいだ〉に愛があるとき、互いの超越は消えてしまう。ただマッカーシーは、他者の〈アイダガラ〉に「他者の超越」を見いだす。筆者が彼女を評価したいのは、差異を堅持しながら、〈アイダガラ〉を重視する点である。というのも、彼女にとっては、繰り返される戦争や紛争、身近な

日常のなかで子供や女の肉体を傷つけるレイプや性的虐待に対して、〈肉体化された倫理〉を考えようとしているからだ。性的肉体を物体として扱い、人格性を含んだ「身心 mindbody」⁽³⁴⁾として扱わない暴力は、マッカーシーによれば、西洋哲学の嫡出子である。

しかし肉体化された自他が〈アイダガラ〉の関係にあるとき、暴力は存在しない。なぜなら自他は、肉体的〈アイダガラ〉における〈多孔の粘膜〉の関係にあり、自他が互いに浸透するからだ。もし「性的」暴力が介入するとすれば、自他の差異が消去され、他者の肉体が性的物体に変容しているはずだ。私たちの自他関係は、様々に変様しながら、「皮膚」や「粘膜」を介して私たちの「身心」を変化させる。ここでは自他の〈アイダガラ〉が自他相互の生成変化の連続を引き受ける。

そしてケアの現場でも、ケアする人とケアされる人とは立場を変転させながら、アナキーに変様し続ける。ケア関係においては、自他の生成消滅と相互転換に基づく無数のケアが繰り返される。そこでは、マッカーシーがグリッサンに触れているように、「異なるものを同化することも包摂することもなく、他者に対して開かれること、他者を勇気づけ励ますこと、そして他者と交流することの理解の方法」⁽³⁵⁾がケア行為として実践されている。

他者を同化せず、他者を排除せず、他者とながらながら、他者との差異を消去しないケア倫理こそ必要なのだ。私たちが

〈特異的個人〉として、他者との〈あいだ〉を尊重しながらつながること、そこに〈地球〉上で展開する〈ケアの地球倫理〉への第一歩がある。

いかにしてケアする人とケアされる人、さらにはケアするものをケアするものとの〈あいだ〉を無視せず、無限につながる〈肉体を介したケアの連鎖〉が互恵性を損わずに他者を「超越」として尊重しうるか。また特異的個人が、差異を消去する全体化を回避し続け、いかにして連帯しうるか。これらの問いに答えることが、〈ケアの形而上学〉^{メタフィジクス}に課せられているのである。

- (1) E. McCarty, *Ethics Embodied: Rethinking Selfhood through Continental, Japanese, and Feminist Philosophies*, Lexington Books, 2010.
- (2) 高祖岩 二郎『新しいアナキズムの系譜学』河出書房新社、二〇〇九年、二五頁。
- (3) E. McCarty, *op. cit.*, p.1.
- (4) 和辻の概念を引用するに際して「マッカーシーが用いる場合はカタカナで表記する。」
- (5) McCarty, *op. cit.*, p.13.『倫理学 上』、『和辻哲郎全集 第十卷』所収 岩波書店「二二頁参照。マッカーシーは『倫理学』英訳版を用いてる。」
²⁹ Cf. Watsuji Tetsuro, *Watsuji Tetsuro's Rinrigaku: Ethics in Japan*, trans. Yamamoto Seisaku and Robert E. Carter, SUNY Press, 1996, p.9.
- (6) 和辻『倫理学 上』二六頁以下参照。
- (7) 和辻、同書。
- (8) 和辻、同書。
- (9) 和辻哲郎『風土—人間学的考察』(一九三五)、岩波文庫「一九七九—二〇〇七年、二二頁。

(10) Cf. Watsuji Tetsuro, *Climate and Culture*, Trans. Geoffrey Bowmas, Greenwood Press, Inc. in cooperation with Yushodo Co., Ltd., 1988.

(11) 和辻は『風土』のなかで「寒さ」を「我々」の共通体験としての「間柄」の産物であると語っていた。ちなみに『日本哲学資料 (Japanese Philosophy A Sourcebook)』の「Watsuji Tetsuro and 和辻哲郎 (1889-1960)」の項目では「A phenomenology of the cold (寒さの現象学)」と題されて「気候や風土と人間の感覚に関わる和辻の分析が取り上げられる」(G. Bowmas(trans.), *A Phenomenology of the cold* in: J. W. Heisig, Th. Kasulis, J.C. Maraldo, *Japanese Philosophy: A Sourcebook*, University of Hawaii Press, 2011, pp.856-859.)³⁰

(12) 筆者は「マッカーシーが「ニンゲン」を自己として理解することの問題について検討したことがある。森村修「身体化された「ケアの倫理学」(1)―フェミニスト哲学と『和辻倫理学』の比較哲学的考察」法政大学国際文化学部編『異文化』15、二〇一四年を参照せよ。

(13) 子安宣邦は「和辻の「二人共同体」を批判している(子安宣邦『和辻倫理学を読む—もう一つの「近代の超克」』青土社、二〇一〇年)」。九〇年、四六頁。Cf. Yuasa Yasuo, *The Body: Toward an Eastern Mind-Body theory*, SUNY Press, 1987.

(14) マッカーシーの和辻身体論には「湯浅の身体論からの影響がある」(Cf. E. McCarty, "The Knowing Body" in: G. Csaperegi (dir.), *Sagesse du Corps*, Éditions du Seuil, 2001, pp.164-173.)³¹

(15) マッカーシーが『倫理学 中』「人倫的組織」の章を読んだ形跡がなす理由として「英訳版『倫理学』がオリジナルの『倫理学』の抄訳ではないということが考えられる」(M・ラリモア「英米人は和辻倫理学が読めるか?」佐藤康邦他編『甦る和辻哲郎—人文科学の再生に向けて』ナカニシヤ出版、一九九九年参照)。

(16) F. Brügère, *L' éthique du «care»*, Collection QUE SALS-JE ?, Presses Universitaires de France, 2011, 2013 (F・ブルジエール『ケアの倫理—ネオリベラリズムへの反論』・原山哲／山下えり子訳、文庫ク

- セシト、二〇一四年、一三三頁)。
- (18) F・ブルジエール、同書、二〇頁。
- (19) L. Irigaray, *Ethique de la différence sexuelle*, Editions de Minuit, 1984, p.13.
- (20) *ibid.*, p.23. Cf. McCarty, *op.cit.*, p.74.
- (21) L. Irigaray, "Questions to Emmanuel Levinas," in: M. Whitford (ed.), *The Irigaray Reader*, 1991, p.178.
- (22) L. Irigaray, *op.cit.*, p.14.
- (23) T・ロレーンは、イリガライが様々な場所で「性的差異」に特権を与え、女と男の〈あいだ〉にある「還元不可能な irreducible」差異は「存在論的 ontological」差異であることを述べているが、それらはあくまで文化的に特殊な状況のなかで読まなければならないと忠告している (Cf. T. Lorraine, *Irigaray and Deleuze: Experiments in Visceral Philosophy*, Cornell University Press, p.21.)。
- (24) Cf. L. Irigaray, *Ethique de la différence sexuelle*, pp.19-20.
- (25) *ibid.*, p.20.
- (26) L. Irigaray, "Questions to Emmanuel Levinas," p.180.
- (27) マッカーシーは「皮膚」や「粘膜」という言葉を一つのメタファーとして理解している (McCarty, *op.cit.*, p.80)。しかしイリガライ自身は、あくまで具体的な肉体の器官を想起させる概念として重視する (Irigaray, *op.cit.*, pp.24-25)。
- (28) 和辻『倫理学 上』、『和辻哲郎全集』第一〇巻、三四四頁以下参照。
- (29) L. Irigaray, *Between East and West, From Singularity to Community*, Trans. S. Pluháček, New York: Columbia University Press, 2002, Delhi: New Age Books, 2005, p.115. また、下記を参照のこと。McCarty, *op.cit.*, p.90. イリガライが、安直に、「西洋と東洋の間」を想定することには強い異議を唱えたい。下記も参照のこと。棚沢直子「編者解説」注(16)、棚沢直子編『私たちのフランス思想』勁草書房、一九九八年、二九五頁。
- (30) McCarty, *op.cit.*, p.90.
- (31) 高祖岩三郎、前掲書、一五二頁。
- (32) McCarty, *op.cit.*, p.80.
- (33) 和辻『倫理学 上』、『和辻哲郎全集』第一〇巻、一八頁参照。
- (34) Cf. McCarty, *op.cit.*, p.96f.
- (35) McCarty, *ibid.*, p.81. また高祖は家庭環境において日常的に虐げられてきた無数の「情動労働者」あるいは「愛の労働者」と彼女、彼らの身体による「新しいアナキズム」を提唱する (高祖、前掲書、二一六頁)。
- (もりむら・おさむ、ケア倫理学・現象学・日本哲学、法政大学大学院教授)